

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：32672

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380911

研究課題名(和文) 保育者の被援助志向性の検討とグループアプローチによる介入に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Reliability and Validity of the Help-Seeking Preferences Measure of Nursery School Teachers and Intervention by the Group Approach for Nursery School Teachers

研究代表者

齊藤 崇 (Saito, Takashi)

日本体育大学・児童スポーツ教育学部・准教授

研究者番号：20461725

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：保育者が他者への援助要請行動に影響を与える保育者被援助志向性を測定するために、保育者被援助志向性尺度の作成を行った。さらに、保育者被援助志向性と精神的健康、首尾一貫感覚とそれぞれ相関関係が認められた。さらに、一般的な保育の研修を受講した場合とグループアプローチの要素を取り入れた保育の研修を受講した場合とでは、両者ともに、事前、事後、フォローアップでの保育者被援助志向性の増加が認められなかった。

研究成果の概要(英文)：We made a new scale for the help-seeking preferences measure of nursery school teachers. The help-seeking preference is because we have influence on the help-seeking behavior. As a result, the help-seeking preference has a correlative relation with GHQ. And the help-seeking preference has a correlative relation with SOC. When they attend the general training about care and education, the score of help-seeking preferences did not increase them. Similarly, when they attend the training of the group approach about care and education, the score of help-seeking preferences did not increase them.

研究分野：心理学

キーワード：被援助志向性 グループアプローチ 保育者

1. 研究開始当初の背景

(1) 問題

近年、保育者の早期離職や潜在保育士の増加などが叫ばれている中で、保育者の人材不足が、保育施設の運営に影響を与えたり、待機児童対策が進まないといった弊害も出てきている。また、保育者を養成する立場では、いかに保育という仕事を専門職として、長い期間、勤務をする保育者が増加するという願いが存在する。

このような問題意識の中で、保育者の早期離職を防ぐために、保育者のストレスの低減やバーンアウトを防ぐことが急務であると考えるが、ストレス低減やバーンアウト防止に関連する概念の検討が必要と考えた。

そこで、本研究では、関連する概念として、精神的健康、SOC(首尾一貫感覚)そして、援助要請行動を左右させる被援助志向性に焦点をあてて研究を行うことにした。

特に、被援助志向性については、保育職場特有の環境が存在することから、本研究で保育者としての被援助志向性を測る尺度を作成し、関連した概念との関連を調べることとした。

さらに、本研究では、保育者の研修に着目した。従来のような一方的なコミュニケーションが中心の研修が多い中で、双方向のコミュニケーションが取れるような形で、仲間意識が醸成されるグループアプローチの考え方を導入することで、保育者同士の援助要請行動を促すという仮説のもとで、保育者の被援助志向性に変化がみられるのではないかと考え、現職研修にグループアプローチの要素を導入した場合の介入研究を行い、効果測定を実施するものとした。

(2) 先行研究

今日、保育者のほとんどが、ストレスやバーンアウト等を理由に離職を考える状況にある(文献1)。そのような状況の中で、保育者が子どもの発達を支えるためには、まず、健康であることが重要であるが、採用後2~3年で退職してしまう保育者が多く、保育者の精神的健康について真剣に考える必要がある(文献2)と述べている。

保育者の精神的健康に影響する要因について、健康生成志向における健康因子の一つであるSOC(首尾一貫感覚)に着目して、グループアプローチによる介入をすることでSOCの数値が高くなる(文献3)ことを明らかにした。

さらに、保育者の職場適応の要因として「人と信頼関係をもつこと」「周囲の人に支援をしてもらうこと」「上司・同僚と姿勢」などの要因が存在する(文献4)ことを明らかにした。

以上の結果から、さらに詳細に検討しなければならない課題として、離職の要因を左右すると考えられる精神的健康やSOC(首尾一貫感覚)と「保育者が人的資源から支援を求

めること」(援助要請行動)とが、どのように関連しているか明らかにしなければならないということがみえてきた。援助要請行動については、図のように被援助志向性に含まれる概念として存在しているため、本研究では被援助志向性について焦点を絞って研究を行うものとする。

ここでの被援助志向性とは「個人が情緒的・行動的問題および現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルス・サービスの専門家、教師などの職業的な援助者、および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかの認知的枠組み」(文献5)と定義している。しかし、現在、被援助志向性の研究において、保育者に対する研究は皆無に等しい。

また、被援助志向性がグループアプローチの介入で変化する可能性を残している。本研究において「保育者が人的支援を求めること」を含む保育者の被援助志向性を明らかにすることとする。

文献1

廣川大地 2008 保育者の意欲継続、離職意向に関する研究の動向 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要,40,83-90

文献2

西坂小百合 2002 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響 教育心理学研究 50,283-290.

文献3

齊藤 崇 2012a ベーシック・エンカウンターグループ参加者にみる SOC の変化,日本人間性心理学会第31回大会発表論文集

文献4

齊藤 崇 2012b 保育者の成長と職場適応に関する研究,日本保育学会第65回大会発表論文集

文献5

水野治久・石隈利紀 1999 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究,47,530-539.

文献6

田村修一・石隈利紀 2002 中学校教師の被援助志向性と自尊感情の関連 教育心理学研究,50(3),291-300

文献7

田村修一・石隈利紀 2006 中学生教師の被援助志向性に関する研究 状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討 教育心理学研究,54,75-89.

文献8

久保真人・田尾雅夫 1992 バーンアウトの測定 心理学評論,35,361-376.

文献9

小牧一裕・田中國夫 1993 職場におけるソーシャルサポートの効果 関西学院大学社会学部紀要,67,57-67.

2. 研究の目的

本研究は、保育者（保育士・幼稚園教諭）の被援助志向性に着目し、保育者が職務上、困難に直面した際に、他者に援助を求めるかどうかの認知的枠組みを測定する尺度を作成する。また、健康生成志向における健康要因の一つである SOC（首尾一貫感覚）や精神的健康との関連を明らかにする。さらに、先行研究で被援助志向性と自尊感情の関連について示唆していることから、自尊感情を高めると認められるグループアプローチによる介入の効果の検証を行うこととする。

3. 研究の方法

初年度は、保育者の被援助志向性に着目して、保育者が職務上、困難に直面した際に、他者に援助を求めるかどうかの認知的枠組みを測定するための新たな尺度を作成するために、まずは、予備調査として、保育者 11 名（M=22.3 歳、SD=1.35）に対して、半構造化面接を実施した。総面接時間は 6 時間 14 分 4 秒で一人当たりの平均面接時間は約 34 分であった（Table.1）。IC レコーダで録音した音声データをもとに被援助志向性にかかわる項目を作成の際のデータとした。

そして、被援助志向性に関する文献と半構造化面接の結果をもとに、保育者の被援助志向性に関する質問項目を作成した。その後、保育者にかかわっている臨床心理学の専門家 3 名程度により内容的妥当性の検討を行い、保育者の被援助志向性に関する予備項目が見出された。項目数は 25 項目であった（例：私は、保育者として困っている時に一緒に、対処してくれる他者が欲しい）。

Table.1 半構造化面接を実施した保育者の属性と面接時間

	保育歴	性別	年齢	勤務種別	職務内容	面接時間
A	3年目	女性	23歳	私立保育所	0歳児担任	40分57秒
B	4年目	女性	24歳	私立保育所	5歳児担任	27分33秒
C	4年目	女性	23歳	公立保育所	2歳児担任	42分24秒
D	1年目	女性	21歳	私立保育所	4歳児フリー	48分39秒
E	1年目	女性	21歳	公立保育所	0歳児担任	29分34秒
F	1年目	女性	21歳	私立保育所	3歳児担任	27分05秒
G	1年目	女性	21歳	私立保育所	4歳児担任	13分24秒
H	3年目	女性	24歳	公立保育所	0歳児担任	39分27秒
I	3年目	女性	24歳	公立保育所	2歳児担任	44分19秒
J	1年目	女性	22歳	私立保育所	4歳児担任	26分14秒
K	1年目	女性	21歳	私立保育所	0歳児担任	34分28秒
					面接合計	6時間14分4秒
					1人当たり	34分00秒36

予備項目で内容的妥当性を満たす項目については、項目分析を実施し、さらに、天井効果・床効果を確認した後に、G-P 分析を行った。

次年度は、予備項目について、構成概念妥当性や基準関連妥当性の検討を行うために、現職の保育者 574 名に調査依頼を行い、郵送法による質問紙調査を実施した。実際に回答を行った調査対象者は 460 名となり、研究協力者の 52 名で欠損値が存在したため、欠損値を除いた分析対象者は 408 名（男性 53 名、女性 355 名、M=32.48 歳、SD=10.08）、保育歴平均 8.68 年となった。なお、調査開始にあたって、筆者所属先の倫理審査委員会におい

て研究倫理審査を受け、審査承認手続きに基づき、調査対象者に対して説明を行い、合意を得られた。以上のように、調査実施の過程において倫理的配慮を行った。なお、調査時期は、調査の時期は、2014 年 8 月 12 日から 8 月 31 日の間に実施した。

調査の質問項目は、予備項目と特性被援助志向性尺度（文献 7）、バーンアウト（燃え尽き症候群）尺度（文献 8）、職場用ソーシャルサポート尺度（文献 9）を設問項目とした。

特性被援助志向性尺度は、13 項目で成り立っており、「全くあてはまらない」1 点から「よくあてはまる」5 点の 5 件法で成り立っている。さらに、バーンアウト（燃え尽き症候群）尺度は、17 項目で成り立っており、「ない」1 点から「いつもある」5 点の 5 件法であり、職場用ソーシャルサポート尺度は、「そう思わない」1 点から「そう思う」5 点の 5 件法であった。

最終年度は、現職の保育者 317 名に質問紙調査で依頼を実施したが、欠損値を除いた研究対象者は 152 名（男性 15 名、女性 137 名、M=30.6 歳、SD=9.27）、保育歴平均 7.93 年となった。なお、調査開始にあたって、筆者所属先の倫理審査委員会において研究倫理審査を受け、審査承認手続きに基づき、調査対象者に対して説明を行い、合意を得られた。以上のように、調査実施の過程において倫理的配慮を行った。

なお、調査時期は、調査の時期は、2014 年 10 月 1 日から 10 月 31 日の間に実施した。保育者被援助志向性と SOC（首尾一貫感覚）、精神的健康度についての関連をみるために相関分析を行った。

さらに、グループアプローチの介入研究を行った。研究の実施時期は、2015 年 10 月から 2016 年 1 月の期間であった。現職の保育者 22 名（男性 0 名、女性 22 名、M=24.5 歳、SD=2.42）保育歴平均 4.86 年に研究協力を依頼し、統制群 11 名（女性 11 名、M=23.8 歳、SD=2.36）保育歴平均 4.09 年、実験群 11 名（女性 11 名、M=25.3 歳、SD=2.37）保育歴平均 5.64 年のグループ分けを行った。統制群は、保育者としての通常の研修を 8 時間、実験群は、研修ではあるが、グループアプローチの考え方を取り入れて、参加者が互いに交流を持てるプログラムを 8 時間、実施した。実験群・統制群ともに、実施前・実施後・フォローアップ（1 か月後）に質問紙調査を行い、保育者被援助志向性の効果について分散分析を行った。

なお、統計処理に当たっては、統計処理ソフト SPSS を使用した。

4. 研究成果

保育者の被援助志向性に関する質問項目（25 項目）を項目分析し、天井効果・床効果、G-P 分析を実施したが、問題のある項目については取り除いた。そして、因子分析＜最尤法・プロマックス回転＞をおこなった。

第1因子は「援助の抵抗感の低さ」、第2因子は「援助の欲求」とそれぞれ命名した。

Cronbach の 係数は .83 以上であった (Table.2)。

また、第1因子 (援助の肯定感の低さ) と第2因子 (援助の欲求) について、下位尺度間相関で、 $r = .22$ となり、1%水準で有意であった。したがって、下位尺度間では、弱い正の相関が認められた (Table.3)。

さらに、保育者被援助志向性尺度の妥当性を検討するために「バーンアウト」と「職場におけるソーシャルサポート」との相関分析を行った。「バーンアウト」では、 $r = -.17$ となり、1%水準で有意となった。負の弱い相関がみられた。「職場におけるソーシャルサポート」では、 $r = .38$ となり、1%水準で有意となった。正の弱い相関がみられた。

その後、その人が特性としている被援助志向性との相関分析を行った (Table.4)。

「特性被援助志向性」では、 $r = .64$ となり、1%水準で有意となった。正のある程度の相関がみられた。

以上のように、保育者被援助志向性尺度の作成を試みが、類似概念との相関について、弱い相関ではあったため、ある程度の妥当性が認められたものと考えられる。

さらに、Cronbach の 係数が .83 ~ .84 であったことから、一貫性における信頼性についても、ある程度、認められたものと考えられる。

Table.2 保育者被援助志向性尺度の因子分析の結果 (最尤法・プロマックス回転)

質問項目	因子I	因子II	共通性
第1因子: 援助の抵抗感の低さ (9項目, $\alpha = .81$)			
14 私は、保育者として困っている時に、他者からの援助をうけることを恥ずかしく感じる (*)	.72	-.02	.53
19 私は、保育者として困っている時に、他者の援助を求めると能力がない人間と思われそうである (*)	.69	.08	.45
15 私は、保育者として困っている時に、他者からの援助を受けると緊張する (*)	.68	.90	.43
13 私は、保育者として困っている時に、他者からの援助を受けることに戸惑いを感じる (*)	.64	-.15	.48
18 私は、保育者として困っている時に、プライドがあるので他者に頼りたくない (*)	.63	-.16	.48
16 私は、保育者として困っている時に、他者が助けてくれるか不安に思う (*)	.60	.22	.54
17 私は、保育者として困っている時、同僚に気持ちや考えを伝える自信がない (*)	.59	.03	.54
8 私は、保育者として、他者からの助言や意見を受けることに抵抗がある (*)	.52	-.17	.55
7 私は、保育者として困っている時、他者に抱えている問題を理解してもらえない (*)	.47	-.01	.22
第2因子: 援助の欲求 (7項目, $\alpha = .85$)			
10 私は、保育者として困っている時に、他者に相談したい	-.03	.50	.65
11 私は、保育者として直面した困難な問題について、誰かに悩みを聞いて欲しい	.03	.75	.60
2 私は、保育者として困っている時、他者に声をかけ合うなどのコミュニケーションがとりたい	-.02	.66	.44
3 私は、保育者として困っている時、他者から適切な助言や意見が欲しい	.06	.65	.41
9 私は、保育者として困っている時に、一緒に対処してくれる他者が欲しい	.13	.65	.39
1 私は、保育者として困っている時、他者に話しかけたい	-.05	.54	.30
4 私は、保育者として困っていることを解決するために、自分から他者に学びたい	-.11	.44	.23
因子間相関		因子II	.27

(*) は、逆転項目をあらわす。

Table.3 保育者被援助志向性尺度の下位尺度間相関

		N=408
第2因子<援助の欲求>		
第1因子<援助の肯定感の低さ>		.22 **
		* P<.05 ** P<.01

Table.4 保育者被援助志向性尺度と類似概念の尺度との相関

			N=408
	バーンアウト	職場用ソーシャルサポート	特性被援助志向性
保育者被援助志向性	-.17 **	.38 **	.64 **
			* P<.05 ** P<.01

次に、保育者被援助志向性と「首尾一貫感覚 (SOC)」と「精神的健康 (GHQ28)」との相関分析を行った。「首尾一貫感覚 (SOC)」では、 $r = .39$ となり、1%水準で有意となった。正の弱い相関がみられた。また、「精神的健康 (GHQ28)」では、 $r = -.25$ となり、1%水準で有意となった。負の弱い相関がみられた (Table.5)。

Table.5 保育者被援助志向性尺度と首尾一貫感覚、精神的健康の尺度との相関

N=152		
	首尾一貫感覚	精神的健康
保育者被援助志向性	.39 **	-.25 **
		**p<.01 *p<.05

さらに、統制群、実験群ごとにそれぞれに実施前・実施後・フォローアップの3つの時期別にみた得点について、対応ありの1要因分散分析を実施した。統制群については、 $F(2,20)=3.07, n.s.$ であり、有意差は認められなかった。また、実験群については、 $F(2,20)=0.42, n.s.$ であり、有意差は認められなかった。したがって、統制群、実験群ともに被援助志向性の得点が上昇する傾向は認められなかった。

なお、統制群、実験群ともに実施前の群比較において、t検定を実施したが、有意ではなかったため、等質な群であるとみなした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計3件)

齋藤 崇 保育者の被援助志向性に関する研究 日本保育学会第66回大会 2013年5月12日 中村学園大学・中村学園大学短期大学部

齋藤 崇 保育者の被援助志向性に関する研究 - 保育者の被援助志向性の探索的検討 - 日本応用心理学会第81回大会 2014年8月31日 中京大学

齋藤 崇 保育者被援助志向性尺度作成の試み 日本保育学会第69回大会 2016年5月9日 東京学芸大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 崇 (SAITO takashi)

日本体育大学・児童スポーツ教育学部・准教授

研究者番号: 20461725